

園だより

第 6 号

平成 3 0 年 8 月 3 1 日



ばんけい幼稚園

「真似て 学ぶ」

副園長 尾形玲子

7月の誕生会では行事部のお母様方による劇「おおきな かぶ」を見せていただきました。お忙しい中、子どもたちのために準備、練習を重ね、本番では子どもたちにたくさんの驚きと感動、楽しい時間をくださり、ありがとうございました。

子どもたちは自分のお母さんが出演していればもちろん、お友だちのお母さんが出演し自分たちのために演じてくれたことを嬉しく感じていました。（子どもたちは劇の間にも「〇〇ちゃんのパパだね」「お母さんが〇〇作ってた！」と嬉しそうに話をしていました。）

そして、子どもたちがワクワクするような構成を考え、感性を刺激するお話になっていて、子どもたちはそれを感じ、大きな刺激を受けたようです。お母様方が笑顔で歌っている姿、歌声を登降園時のバスで知らず知らずのうちに真似ていました。また、忍者の走り、側転に挑戦している子がたくさんいます。

“こうしてみるといいのかな？ “やってみたい！” という気持ちが子どもたちに溢れていました。

子どもは「真似る」ことから「学んで」いきます。特に「楽しそう！」と感じたことには理屈や原理は後付けで、まず「やってみたい！」の気持ちで動きだします。何か違うけれど…うまくできないけれど「やってみた」満足感、それから「もう少し！」「もっと！」という意欲が次々と湧いてきます。

子どもの周りには真似てみたくなるようなモデルがたくさんあります。年上や同年齢の友達、おうちの方、テレビのキャラクター等々。子どもたちは（子どもに限らず大人も）心が動かされたから、興味関心があるから真似したい気持ちが湧いてくるのでしょうか。

それは遊びだけではなく“人との関わり方”“日常生活での言葉や行動”等いろいろな場面に表れていると思います。子どもたちの姿から「見て、真似て、身につけたこと」がたくさんあるように思いませんか？大人は“教えよう”“できるようにしよう”という気持ちが強くなってしまいがちですが「見せる」ことで子どもたちは自然と大切なこと、必要なことを学び、身につけているのではないのでしょうか。私たち大人は、子どもの真似たい気持ちをキャッチしてモデルとなり、“いい”タイミングで“いい”具合に手伝ってあげることが大切なのでしょう。

と書きながら、私自身もわが身を振り返り“子どもたちの良きモデル”となれるよう努力したいと思っています。